

研 修 機 関	特別養護老人ホーム 長寿園
研 修 期 間	平成17年10月1日～10月31日
所 属 ・ 氏 名	珠洲市立正院小学校 大門 祐佳里

I 研修目的

- ・学校現場を離れ異なる職場を経験することにより、これまでとは違う角度から教育観や指導観を見つめ直し、教師としての資質の向上を図る。
- ・企業としての理念や組織の体制を学び、学校現場のあり方や教員として求められるものについて考え、社会的視野を広げる。
- ・介護の現場を体験することにより、高齢者福祉についての見識を深め、今後の指導に活かす。

II 研修内容

1 入居者の生活援助

①介護全般の補助

- ア 移動介助・・・トイレへの誘導、お風呂場への誘導、
ベッドから車椅子へ（車椅子からベッドへ）の移乗
- イ 食事介助・・・湯茶配り、エプロン等の準備、食事の配膳、下膳、食事介助、
口腔ケア
- ウ 入浴介助・・・衣服の着脱介助、ドライヤーでの整髪、水分補給
- エ 排泄介助・・・排泄介助、おむつ交換

②作業

洗濯物たたみと仕分け、入居者の居室の清掃、シーツ交換など

③コミュニケーション

話し相手、レクリエーション、見守り

2 デイサービスの援助

①介護全般の補助

- ア 移動介助・・・トイレへの誘導、お風呂場への誘導
- イ 食事介助・・・湯茶配り、食事の配膳、下膳、食事介助
- ウ 入浴介助・・・ドライヤーでの整髪、水分補給

②作業

洗濯物たたみ

③コミュニケーション

話し相手、レクリエーション

III 研修成果

1 一人ひとりの把握・対応

入居者一人ひとり、介護度が違うのに驚いた。ほとんど介助を必要としない方もおいでれば、食事も自分だけでは困難な方、認知症の方など様々な方がいらっしまった。多様な入居者の健康状態やニーズをとにかくよく把握し、記録することが行われていた。ケアチェック（体温、血圧、排泄回数など）水分・食事量チェック（水分摂取の状況など）、日常生活記録（どんなふうに過ごしておいでたかなど）などいろいろ記録することで一人ひとりを確実に把握し、対応していると感じた。食事の内容の工夫（ご飯かお粥、普通食、きざみ食、ミキサー食）、食器の工夫（動かないお盆、スプーン）、湯茶の工夫（お茶ゼリー、とろみをつけたお茶）など飲み込みやすく食事しやすくする工夫がなされていた。また、選択メニューも取り入れられていた。入浴においても、一般浴、椅子型機械浴（チェアイン）、ベッド型機

械浴（特浴）などがあり、一人ひとりに合わせた対応がされ、肌の弱い方はシャンプーをかえるなどきめ細やかに対応がなされていた。おむつについても、個々のニーズに合わせ、布オムツや紙オムツを使い分けたり、当て方も替えたりするなど一人ひとりを考えたケアがなされていた。

デイサービスにおいても同様に、一人ひとりの記録があり、個々に合わせたリハビリ計画がなされていた。食事前の口腔体操や、リハビリ体操などもありさすがプロだと思った。レクリエーションにおいても、飽きないように様々なゲームが用意されていた。形態も大グループで行ったり、小グループで行ったりと本人の趣味やリハビリを考えて行われていた。また、レクリエーションしながらも他の職員が個人的にリハビリを行うなど個々に合わせた対応を行っていると感じた。また、フットセラピーも帰り支度の合間をぬって行われており、至れり尽せりだと感じた。

2 職員の連携

職員の勤務体制は、早番、普通番、遅番、準夜勤、深夜勤と分かれており、その都度次の勤務の人への引継ぎが綿密に行われていた。一人ひとりの記録の他に申し送りノートがあり、情報がきちんと伝わるように工夫がされていた。また、朝夕のミーティングが行われていた。朝のミーティングは本館、新館の各棟の職員・看護師が集まり、夜間の状況の引継ぎが行われ、夕方は各棟で日中の状況の引継ぎが行われていた。他にも、全体の朝礼でその週の予定などを確認したり、職員がその日の予定や状況を知らせたりするための朝礼もあり、常に情報交換が行われているとのことだった。ケース会議もあり、一人ひとりの入居者の様子について話し合いが持たれているとのことだった。対応する人間が替わっていくだけにいつ誰が見ても分かるように記録していくことが必要なのだと感じた。そのためには、職員の連携が大切であると思った。24時間人を預かるというのは大変なことだと改めて思った。

3 多種多様な業務

初めのころは、自分がどんなことをしてよいか分からず、慣れないため、余裕もなかったが、よく見ていると職員の方は様々な業務に携わっておいでるのが分かってきた。体温、血圧などを測ったり吸引を行ったり薬を飲ませてあげたりリハビリを行ったり健康状態を把握したり維持したりするために必要な業務があった。また、リハビリを考えたレクリエーションや楽しさ・季節感を考え生きる意欲を育む行事などを考える業務もあった。また、シーツ交換や掃除、洗濯などホテルのような業務もあった。大変だと感じたのは、入浴介助、排泄介助である。排泄回数に合わせて、トイレへ誘導したりおむつ交換したりするなど一人ひとりの状態や時間に合わせて行うのは大変だと思った。このようないろいろな業務をきちんとこなし、明るく入居者に接しておいでる姿を見て感心させられた。

4 言葉かけの大切さ

初めて長寿園に来たときに感じたことは、職員の方々の言葉かけである。園には、本館と新館があり、在宅福祉サービスセンターもあり、たくさんの人たちが働いている。主に新館の方だったのだが、すれ違う職員同士で「お疲れ様です。」という言葉かけが常にあった。また、何か仕事をした後、「ありがとうございます。」という声かけも多かった。仕事をしていても、自分の仕事が終わったら言葉かけをして自然に他の人の仕事を手伝っている姿をよく見かけた。忙しい職場であるが、お互いに相手に感謝や励ましの言葉かけることでコミュニケーションをとり、人間関係を円滑にしているように感じた。

また、入居者の中にも「ありがとう。」と声をかけてくださる方も大勢おられて励まされた。自分は学校で、職員や児童に対してどうだったかと思うと考えさせられた。

5 訪問の注意点

児童の訪問は、入居者の方たちにとって非日常的なことであり、かわいい児童と接することは楽しみでもある。実際職員の方たちと訪問の受け入れ準備をしながら人を迎える状況にするには労力があることがよく分かった。移動するには介助を必要とする方たちが多く、入居者の方たちが児童と接することができるように集まるまでにはかなり時間がかかるからだ。学校側が訪れる際には、時間割を優先しがちであるが、施設の方の時間も配慮することが必要だと分かった。また、訪問人数や時間の予定をきちんと伝えることが必要であることを感じた。児童が訪問することは思っていた以上に入居者の方たちの楽しみになることを知った。

IV 今後の課題

1 個々へのきめ細かな指導

デイサービスに行ったとき、最後に利用者の方に「本日はご利用いただきありがとうございました。」というようなことを職員の方が言われた。職員の方がよくお世話をしておいでるし、工夫もしておいでると感じていたのも、最初はその言葉の意味がぴんとこなかった。しかし、そういったサービス業的な発想が学校にも必要なのだと感じた。児童あつての学校である。児童・保護者のニーズを考え、一人ひとりに合わせたきめ細かな指導を行うよう努力していきたい。

2 コミュニケーションの大切さ

職員の方や入居者の言葉かけに励まされたことも多かった。学校でも人間関係を円滑にし信頼関係を高める上でのコミュニケーションの大切さを教えていきたいと実感した。そのため、元気に挨拶することの大切さを教え、児童に励ましの言葉をたくさんかけていきたいと思った。また、自分が仕事を教えていただいたときに作業をともにしながら教えていただくと分かりやすく安心できたので、学ぶ側の立場に立って、指導していきたいと思った。

3 職員の連携

勤務体制の関係もあるが、職員間の連携がよくなされていた。声をかけ合って、互いの仕事を理解し合い、協力し合っておいでた。学校では、校務分掌がそれぞれあり、自分の校務分掌は分かるが、他のことはわからないような気がする。互いにどんな仕事をしているかもっと理解し、教育効果をあげるように努力していかなければと感じた。

4 人と接すること

学校と特別養護老人ホームは、違うようで人と接するという点では似ていることも多かった。学校は学習内容を指導することに目が向きがちでありそれが学校の役割でもあるが、もっと長い目でゆったり児童に接することも大切であると感じた。人間として社会人として必要なことは何かを考えさせられた研修だった。学校を離れ、新鮮な目で児童や自分を見つめ直すよい機会となった。

最後になりましたが、貴重な研修機会を与えて下さった石川県教育委員会、学校を離れ研修に出ることを支えて下さった多くの皆様に感謝致します。そして何より、お忙しい中、様々なことを教えて下さった長寿園の職員の皆様、優しく接して下さいました入居者の皆様に深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

研修したことを学校現場で活かし、今後一層教職に励みたいと思います。

